

平成22年 5月 31日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間： 2007～2009
 課題番号：19520066
 研究課題名（和文） 沖縄死者慣行の現代的変容に関する地域研究
 —「本土化」と「沖縄化」の相互作用—
 研究課題名（英文） Area Study on Changes in Funeral Customs in Contemporary Okinawa:
 Mainland Culturalization and Okinawanization
 研究代表者
 村上 興匡（MURAKAMI KOKYO）
 大正大学・人間学部・准教授
 研究者番号：40292742

研究成果の概要（和文）：

沖縄から本土への移住者の文化習慣の変化と、沖縄で進行しつつある本土的な文化習慣が普及する変化（「本土化」）とを比較することで、現在の沖縄で起きている変化は、単に本土の文化習慣が沖縄に移入しているわけではなく、それに先だって、まず本土へ移住した沖縄系移住者が、自らの文化習慣を本土に適応させて新たな形を作り出すということがあり（「沖縄化」）、それが再び沖縄に移入されるという形で、文化変容が起きていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

By researches and interviews to Okinawa immigrants to Osaka, we understood the following facts. Changes of customs in contemporary Okinawa did not occur by direct introduction of customs in mainland. The immigrants remodeled their customs, and they changed their customs into suitable form for mainland. Changes in Okinawa area happen by putting that remodeled customs into Okinawa again.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：本土化・沖縄化・死者慣行・現代的変容・宗教学

1. 研究開始当初の背景

本科研に先立って行った科学研究費補助金を受けた研究『沖縄における死者慣行の変容と「本土化」』（課題番号 16520056）においては、現代沖縄における死者慣行の変化を明らかにすべく調査を行ってきたが、昭和 47

年の本土復帰を境として、特に沖縄の都市部において仏式葬儀慣習や葬祭業者など本土的なやり方が急激に流入している（本土化）。その一方で、家筋や墓地の意識、沖縄的宗教慣行などの伝統的要素が形を変えながら根強く残されている（沖縄化）面も散見された。

沖縄における本土的慣習の普及を、単に本土の慣習の移入と捉えるのではなく、本土的文化慣習と沖縄的文化慣習の相互作用として捉える必要があるとの考え方から調査を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究では (A)本土に移住した沖縄出身者コミュニティへの調査(「本土化」の意味の探求)、(B)現代沖縄における伝統的要素の変化(「沖縄化」の意味の探求)、(C)本土における戦没者祭祀における沖縄の位置づけの変化と沖縄における戦没者祭祀受け入れの歴史についての調査(本土に対する沖縄、沖縄に対する本土の死者慣行の影響関係を明らかにするための調査)の3つを行うことにより、本土側、沖縄側、双方の視点から、死者慣行における「本土化」、「沖縄化」のそれぞれの意味と相互関係について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

「(A)「本土化」の意味の探究」については、次のふたつを行った。

①沖縄から本土への一般移住者の死者慣行、墓地に対する意識についてのインタビュー調査

②沖縄出身の霊園墓石業者へのインタビュー調査

「(B)「沖縄化」の意味の探究」については、次のふたつを行った。

①現代沖縄における門中制度の再検討

②沖縄都市部移住者の死者慣行、墓地慣行についての比較研究

「(C)沖縄死者慣行の本土への影響」については、次のふたつを行った。

①本土における戦没者祭祀の歴史と沖縄戦没者祭祀の位置づけに関する調査。

②沖縄における戦没者祭祀受け入れの歴史と沖縄戦没者祭祀の位置づけに関する調査。

聞き取り調査および資料調査を行い経緯と意味とを明らかにした。

4. 研究成果

1) 沖縄本島都市部周辺地域における仏教寺院の現状と展望に関する調査

沖縄は現在仏教各派が布教開教に特に力を入れている。そのため、まず、「沖縄における死者慣行の変容と「本土化」」において行った、沖縄本島都市部周辺地域における仏教寺院の現状と展望で、未調査であった寺院とその後新に成立した寺院に対する調査を行った。これまで全く開教寺院の無かった真言宗豊山派では、東京で住職をしていた0師がH寺を建立し、弁護士資格を有効活用しつつ、各宗派を纏め遺骨収集などの平和活動を展開している。またや浄土宗G寺は、地元出身

者独自の開教活動を開始している。

また、浄土宗寺院は、2006年に合同で「五重相伝会」を開筵したことによって、その後、その効果が現れ始めていることが明らかになった。「沖縄における浄土宗寺院の展開と受容化」のアンケート分析で、「五重相伝会」受者の意識が今後の積極的な寺院行事参加を希望していたことが明らかになったが、一番参加者の多かった浄土D寺は、開筵の準備のため始めた檀信徒の月例の念仏の会を、「和順の会」改称継続し、毎月30人以上を集め、本堂が満員になるほどである。「和順の会」は、全員が日常勤行式を誦読した後、副住職が解りやすく、仏教の教えを沖縄の宗教と比較し例えながら法話を行う。沖縄の家庭には仏壇はあっても、本尊を祀らず「トートーメ」(先祖の位牌)のみを祀るのが伝統的であるが、この会を通じて、本土のように本尊の阿弥陀如来を祀る家が増えてきている。

次に沖縄本島で、寺院の介在しない葬儀を行う地域の実態調査として、本島北部の伊江島の調査を行った。伊江島には、寺院はあるが歴史的に葬儀を行っていない。島民は、町営の斎場を使い、棺や位牌は専門店ではなく、副業で合板を加工して作っている。お経などはあげない告別式形式である。現在はフェリーが頻繁に往復し、本当への便は極めて良くなっているものの、仏教式の葬祭文化を受け入れるには、未だ隔絶感があるようである。

2) 沖縄からの移住者に関する調査(大阪府大正区)

大正区は、江戸期以来埋め立てによって拡大してきた地域である。材木の巨大な集積地貯木場でもあり、沖縄からの男性労働者が必要とされた。また女性は、日紡など多くの紡績工場に就職した。大正区平尾地区等を中心に現在も多く沖縄出身者が居住している。この地区では、沖縄出身者の宗教生活、特に死者慣行としての寺院との関わりについて調査を行った。江戸期の新田開拓以来、いわば開教寺院が各宗派合わせ10ヶ寺以上成立してきているが、沖縄出身者を数多く受け入れてきている寺院は、浄土真宗大谷派S寺のみとあってよい。この寺自体が開教2世寺院で、前住職が福井県の寺院から大正区に開教したことに始まる。積極的な開教の成果とも言えるが、現在この寺院に所属する全門徒の約6割1200軒ほどが沖縄出身者ではないかと住職は考えている。この寺は、大正区の寺の典型で、境内は狭く本堂の上が納骨堂になっている。大阪には巨大霊園が多く点在しているために、納骨堂ではなく霊園利用者も多い。こうした事情から、沖縄でもそうであるように、納骨堂利用門徒は別として、寺院との緊密な寺檀関係は弱いと住職はいう。護持会費のような会費制度もないために、法事や

月参りの依頼が無くなり、知らず知らずのうちに寺と縁が切れてしまうケースがままあるという。それを敢えて、追いかけてはしない。これも沖縄的と言えるかもしれないし、都市開教の特徴とも言える。

大正区には、大きな仏壇店があるが、その3階には、沖縄式の仏壇とトートメが展示されている。また、旧盆や清明の祭りの供物を扱う商店は、大正区では多くはないが、沖縄出身の人は大概が知っていて利用している。

大正区に、近年「琉球古真言 T寺」ができた。寺院の外見はなく、普段は閉まっていて、連絡先は、沖縄本島となっている。連絡先を訪ねてみると、沖縄の開教寺院には希なほど大きな建物であった。しかし、2009年春、住職の尼僧は既に遷化されていた。現在、寺を護っているのは甥の僧侶である。短い時間ではあったが、その話しで解ったことは、沖縄で生まれ大正区に移り住み、その後ユタとしての霊能力が強くなり、いろいろ相談に乗るなかで、高野山真言宗の寺院住職から僧籍をとることをすすめられ、資格取得した。その後、その住職から沖縄での布教を勧められ、独自の真言宗として「琉球古真言」と命名したという。その後沖縄での本格的な開教活動の矢先、遷化することになった。

調査のなかで、本土でユタ能力が開花するこうしたケースは、他にも見られた。もうひとつの例は、通称「I ユタ」さんである。彼女も既に死亡している。友人の老女の話によると、彼女も大正区でユタ霊能が開花した。「I ユタ」さんも、知人などの相談に乗るうち、知り合いの紹介で、吉野山の修験本宗の資格を取得している。こうしたふたつのケースは、沖縄における寺院の展開のなかで、本土復帰以後、ユタであった田場道龍師によって多くの沖縄のユタたちが宗教活動の公認のために、大阪の吉野山の修験本宗の僧侶の伝手で僧侶の資格を取得したケースと酷似している。われわれの調査によれば、吉野山の修験本宗の資格取得は、さほど困難ではないコースも用意されていたと思われる。近年の、浄土宗系の仏教大学の通信教育による僧侶資格取得コースやこうした本山の資格取得など比較的容易なことも、沖縄の仏教寺院の展開のひとつの要因となっていることが考えられる。

3) 沖縄における本土式墓地と大阪における沖縄出身者の墓地について

1972年の本土復帰にともない本土の慣習(葬祭業者による葬儀補助、仏教寺院による告別式葬儀)や、法律(「宗教法人法」「墓理法」)、人間や業者(葬祭業者、石材業者)が沖縄へ流入が進み、それが沖縄の死者慣行に変化を与えている。これは、いわば文化移入の側面でもとらえることもできるが、それを促

進した背景には、都市化、近代化の影響がある。

特に2005年以降では、本土及び島嶼地域からの大量の人口が南部都市地域に流入し、那覇周辺地域では大規模な都市再開発が進んでおり、地域社会、生業および地域の人間関係に変化を与えている。市域の拡大により生活空間からの墓地が排除される。また都市社会においては家の流動性が高く墓の無縁化が進みやすい。こうした傾向は沖縄、本土の別にかかわらず、都市化した地域では一般的に見られる傾向である。

その一方で、所有地の中に自分の墓をもつ欲求が強かったり、本土式の家墓の中にも、従来の沖縄の墓と同様、段差や骨灰を撒ける穴があったり、葬儀や清明祭などの行事に多くの親戚や近隣の人々が参加するなどの事例にみられるように、依然として沖縄独特の慣習や人間関係などが残されている。

本土と同じように宗教法人や公益法人が管理する管理型霊園を、沖縄において最初に作ったのは、株式会社ヤシロであるとされる。社長である正明氏の父親が沖縄出身で、大阪の大手霊園開発会社の役員となっていたが、故郷である沖縄でも霊園開発を手がけることを希望した。1992年に株式会社琉球メモリアルパークが作られ、翌年の93年に沖縄県内では初めてとなる管理型墓地コザ中央霊園を、首里の達磨寺(Daruma-Dera)管理の形で開いた。その後、公益法人沖縄メモリアル整備協会を設立し、その管理で中城メモリアルパーク、泡瀬(Awase)メモリアルパークなど県内7カ所の霊園を開設運営した。大阪の生駒霊園には、沖縄の本土型墓地の原型となったと思われる、大きなカロートをもつ家墓が存在する。

1972年の本土復帰以降、外部人口の流入とそれにとまなう都市再開発が、本土都市部で発達した都市的、個人的な死者慣行を選択させる圧力となった。その一方、依然として従来の沖縄的慣習、人間関係が根強く残されており、その拮抗関係の中で、現在的那覇周辺地域における独特で多様な死者慣行の形態をとるようになったと考えることができる。

4) 遺骨収集を行う宗教団体

本土から沖縄に移住した仏教寺院が沖縄在住の宗教団体と協働して、戦没者の遺骨収集および合同慰霊祭を行っている事例について聞き取りを行った。現在、調査を継続中であるが、暫定的な結論として、本土から戦没者慰霊、遺骨収集を行うものが訪れること、沖縄在住者がその作業に参加することによって、沖縄県側の戦争死者へのまなざしの変化、本土側からの沖縄へのまなざしの変化が生じていると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①武田道生、沖縄における葬祭と仏教、日本精神文化、査読無、第17号、2007年、51-54頁

②武田道生、沖縄における浄土宗寺院の展開と受容、教化研究、査読無、第18号、2007年、8-33頁

[学会発表] (計1件)

①武田道生、沖縄の葬祭と仏教、日本精神文化学会第5回東京例会、2007年6月16日、神田学士院会館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鷺見 定信 (WASHIMI SADANOBU)

大正大学・人間学部・教授

研究者番号：40096003

(H19→H22.2)

村上 興匡 (MURAKAMI KOKYO)

大正大学・人間学部・准教授

研究者番号：40292742

(H22.2→)

(2) 研究分担者

村上興匡 (MURAKAMI KOKYO)

大正大学・人間学部・准教授

研究者番号：40292742

(H19→H22.1)

(3) 連携研究者

小熊誠 (OGUMA MAKOTO)

沖縄国際大学・総合文化学部・教授

研究者番号：90185562

武田道生 (TAKEDA MICHIO)

淑徳大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：30407639

佐藤壮広 (SATO TAKEHIRO)

東洋大学人間科学総合研究所・研究員

研究者番号：3266391324